

“MY TOWN” うおっちゃんぐ

歩キ目デス & 足ラテス

Vol.57

海運業の家、油屋菊池清治家 八幡浜市浜之町

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・
ヘリテージマネージャー

八幡浜市には、意外にレトロな建物が多く残されている。県内の主要な都市の中では、震災に遭っていないことが大きい。それと、南予特有のリアス式海岸に立地した良港の敷地要件から、江戸期より狭隘な土地を埋め立て街区を形成していった為に、戦後のモータリゼーションによる都市変革、道路整備が遅れた。道路拡幅は歴史景観から見れば大敵で、どこの町もその施策により歴史が積み重ねた地域個性を消滅させている。前置きが長くなった、菊池邸の事である。

市中心部、道路幅3.5メートルの浜之町に面して、商家建築菊池清治邸が存在する。その名の如く、江戸期は海に面していた通りで、北側では船場通りと直交する。筋向かいには、文政5年(1822)創業の若松旗店があり、今なお現役で港町の風情を伝えている。



菊池邸正面

(※1) 宇和紡績(株)の看板



本家と五菊池五兵衛、大黒屋野本家、本町西村家などと合わせて一万八千両が藩に上納された。(※2) 本家菊池宏氏の調べによれば、現在の貨幣価値だと数億円の規模になる。

またこの年は日本史上でも大転換期で、二条城にて徳川慶喜に対し宇和島藩主伊達宗城と土佐藩後藤象二郎などが大政奉還を言上しており、まさに翌年が明治元年となる訳で、いよいよ近代の始まりという激動の時代背景である。宇和島藩としてもモノ入りの台所事情を、こうして八幡浜の商人たちが裏で支えたことは、存外一般には知られていない。

さてそうした菊池家であるが、様々な商いをしてきた事が伺えるも、主体は海運業で

菊池家の歴史をひも解くと、南に約100m下がった所に菊池本家があり、その浜出店として天明三年(1783)に初代菊池清治源助が分家独立し、スタートする。建物は、平入り二階建ての二棟が通りに面し、持ち送りが左に四つ、右に式台玄関を挟んで二つ、計六つ並んでいる。持ち送り^{もち送り}は、南予地方の商家に多く見られる軒を支える部材で、樺材に唐草模様の木彫が施され、その数で威勢を競った。

幕末の慶應三年(1867)には、菊池清治家は五千両を宇和島藩に拠出しており、菊池



菊池邸の“持ち送り”



文政年間、菊池清治正明の銘がある中庭の常夜灯

※1. 菊池家蔵の看板。宇和紡績は明治21年、四国最初の紡績会社として登場。

あつたようで、早くも明治10年(※3)には外輪蒸気船の八幡丸が竣工し、瀬戸内海航路を開いている。蔵にはその当時の貴重な船首飾りが残されているが、西洋なら女神像となる所を日本風に鳳凰が型どられていて面白い。よく見ると金漆が塗られていたらしく、進水の際にはさっそうと輝いて時代の水先を切っていた様が想像される。



左がドングラ(道具倉か?)、右がシンクラ(新倉)

宇和島藩は、八幡浜出身の飾り職人提灯屋嘉造(後の前原功山)に蒸気船建造を命じ、湾内を走らせ、惜しくも歴史上は国内で薩摩に次いで二番目だったが、それはお上(藩)が威信をかけてした事。それからわずか19年

面白いと言えば、この家からは他にも大変なものが見つかっている。日本最古と言われる自転車である。平成17年のこと、9代目ご当主が蔵を整理されていて発見。その後、現在は大阪府堺市にあるシマノ自転車博物館に寄贈展示されているが、今春にはこの菊池邸で晴れて市民にもお披露目の里帰り展示となった。この国内でも貴重な三輪自転車は、その後の市民生活で、レプリカを作製するべ



八幡丸の船首飾り「鳳凰」

後には民間の商人が独力で蒸気船建造が出来るようになり、当時の日本あるいはこの地方は早くも殖産興業の活況下にあつたと言える。



7代目菊池清治と三輪自転車

く準備中である。やがてこの家からは、7代目菊池清治が乗った姿の古写真も見つかり、左に掲載させてもらった。撮影年が不明だが、清治氏が八幡浜町長時代ではないかとの事。氏は松山高校の校長を経、戦後初の八幡浜市長ともなっている。当時、土木課建築係に席を置き、後に日土小学校を設計した建築家松村正恒は、存分に腕をふるえたのは、この菊池市長に理解をして頂いたお陰と後年述懐している。そういう東大物理学出身の仁徳者であり、八幡浜市名誉市民ともなっている。

しかし、現在建物は外観以上に老朽化で風前の灯となっており、八幡浜の歴史核がこれ以上消える事のないよう、江戸期創業の若松旗店同様に界限性の維持が今後の大きな市民的課題となっている。

※2. 井上憲久氏の清水家文書研究による。
 ※3. 「瀬戸内近代海運草創史」山崎善啓著より。旧八幡浜市誌には明治8年とあり、調査中。